

スクールソーシャルワーカーの仕事

②初めての関わりと実践

高名 祐美

みおちゃんは、私がスクールソーシャルワーカー（以後 SSW と表現）として、初めて関わった女の子である。出会ったのは小学校4年生の1学期。3年生の3月から登校できなくなり、4年生になってからは1日も登校していなかった。

SSW として教育事務所に登録されたものの、最初の3ヶ月間は何も動きがなかった。いつ依頼がくるのか、いつまでこの状態が続くのか、このまま待っているだけでいいのだろうかと焦りを感じ始めていた7月。初めての依頼があった。教育事務所から「事例は小学校4年生、女兒。3年生の3学期におきた学級内でのトラブルをきっかけに不登校となり、4年生になってからは1日も登校していない。学校から、女性のSSWをお願いしたいとのことです。担当できますか」と連絡があった。当時、管轄の事務所内で女性SSWは私一人だったので、必然的に担当することとなった。

学校からの支援依頼書には『母親は本人の意思を尊重し、医療機関や専門機関を進めても受け入れることはできない。父親は見守る姿勢に努めてはいるが、いつ本来の思いが吹き出すかわからない。父親と母親の考えが異なり、今後どのように進展させていけばよいのか、学校としての対応も苦慮するところである。』と書かれていた。SSWの介入で、学校は成果を求めている。その期待に応えなくてはというプレッシャーは半端ではなかった。とにもかくにもSSWとしての初仕事。『母親と父親の考え方が異なる』、『学校としての対応に苦慮している』、『母親が専門機関への関わりを受け入れていない』・・・文面から読み取れる事柄の背景に何があるのか、SSWとして何をしたらよいのかと悩むばかりであった。

まずは情報収集をと思ったが、学校という対象の理解が十分ではない。だれ

からどのように聴き取りしていったらよいのか、情報収集についても不安ばかりだった。事前に参考図書のSSW実践マニュアルに目を通し、実践事例を読んだりして、学校への初回訪問に望んだ。

7月の暑い日、依頼元の小学校へ向かった。自宅からは車で約1時間かかるところ、田んぼの中にその小学校はあった。規模の小さな古い学校だった。初めての場所。確か学校は出入りのセキュリティが厳しいはず・・・そう思いながら玄関へ。インターホンを右端にみつけ、「SSWの高名です。」と申し出る。

「はい、今開けますね」と返答があり、ガシャンと施錠がとかれる。玄関に用意されている来客用のスリッパ。学校では室内履きが必要なことを改めて認識した。そして教頭に案内されて、校長室に入った。当然ながら初対面の先生方。派遣依頼書なるものがあり、その書類を校長室でいただき説明を受けた。

1学年1学級、全校生徒も89名と小規模の学校。不登校児童は、今回支援依頼があった児童1名のみだという。校長、教頭、担任からそれぞれ状況説明を受けた。驚いたのは担任が児童宅へ、週2回家庭訪問しているという事実だった。学校としてできることには取り組んでいるが、状況が改善しないこと、父親が学校の対応に不満をもっていること、家庭訪問しても本人が会ってくれないこと、児童が感覚過敏でダボダボの制服を着て、ボタンもとめられていないことなどを把握した。説明から、児童はHSC（Highly Sensitive Child ひといちばい敏感な子）かもしれないと感じた。診断は受けていないとのことだった。とにかくまずは母と面接をと考えた。

学校長から母に連絡をとり、ようやくSSWとの面接が設定できたのが9月に入ってからだった。面接前には、校内ケース会議を開催し、課題整理を行っていた。学校は支援計画を作り、実践していたが効果がない状況だった。

母と初回面接。高齢者のデイサービスで介護スタッフとして働いているという母の第一印象は、「スタイルの良い、可愛らしい感じのやさしいお母さん」だった。学校の相談室を準備してもらい、母と一緒にジェノグラムを描きながら、家族のこと、本人のことなど質問を投げかけ、答えてもらった。母はよどみなく答えてくれる。しっかりした方だと感じた。

みおちゃんはひとりっこ。学力は問題ない。ケース会議であげられた強みは「工作やものづくりが好き。将来の夢を持っている。パティシェになりたい。」母は、自分なりに不登校や感覚過敏について学習して、日々実践していた。

面接で気をつけたのは、不登校となった原因を追求しないことだった。現状についてありのままを語っていただき、母の思いを吐き出してもらえようころがけた。原因を探ろうとすると、過去にとらわれてしまう。現状の悪循環

がどんなふうに起きているのかに着目し、そこにどんな変化をうながしたらよいのか一緒に考えようと思った。

母は、奥に溜めていたものを少しずつ、自分がこれまでとりくんできたことや子どもが我慢に我慢を重ねて登校していたことなど語った。ときに感情が溢れ、涙をこらえることができずに言葉をつまらせることもあった。SSWは傾聴に徹し、母の思いを受け止めた。そして面接の最後には「今日、話せて良かったです」の言葉をもらった。

面接結果をふまえて、今後に向けてアクションプランを策定し、校内ケース会議で検討した。一番のポイントは、担任にとって負担が大きいと思われる週2回の家庭訪問をとりやめるという提案だった。母から「放課後登校ができれば・・・」という希望も聴かれたため、親子で学校へ来てもらうよう、変化を促した。

最初は学校へ来ても母親の車から降りれず、車内で身を隠してしまうみおちゃんだった。しかし、回を重ねるうちに、担任や養護教諭の先生と玄関で挨拶できるようになった。友達と会うことへの希望もでてきたことから、給食を学校で友達といっしょに食べるという新たな計画が生まれた。月間献立表から自分で「この日」と決めて、給食時間に合わせて登校する。学校が場所の配慮をし、友達の協力も得ることができた。学校への送迎は、母が職場の理解を得て休憩時間に行ったが、ときには学校長が対応することもあった。担任だけでなく、養護教諭、校長が協働して対応することで、みおちゃんにとって遠かった学校への距離が少しずつ縮まって行ったように思う。

SSWは母との面接を重ね、得た情報や母の思いをケース会議で学校へ伝え、アクションプランの見直しをする役割を担った。なかなか本人とは会えなかったが、本人の気持ちを優先し、「SSWと話したい」という感情が湧いた時に会おうと決めていた。そうして会うことができたのはもうすぐ5年生になろうとする2月のことだった。

みおちゃんとの初回面接以後の経過については、次回に書いていこうと思う。

SSWは、「社会福祉の専門的な知識、技術を活用し、問題を抱えた児童生徒を取り巻く環境に働きかけ、家庭、学校、地域の関係機関をつなぎ、児童生徒の悩みや抱えている問題の解決に向けて支援する専門家」とされている。2008年度文部科学省により「SSW活用事業」が開始され、学校という領域で福祉と教育を繋ぐ役割が期待されている。